OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベトナム語とCALL
Author(s)	清水, 政明
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2008, 9, p. 46-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70269
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ベトナム語と CALL

清水 政明（世界言語研究センター アジア言語文化圏研究部門Ⅱ）

ベトナム語は、日本のみならず世界的に見ても学習の機会が少ない言語といえるだろう。日本で利用可能な既存の CALL 教材は極めて少なく、中級以上のものとなると皆無に等しい。ここでは、筆者がこれまで行ってきたコンピュータ支援型ベトナム語教育を振り返りつつ、反省と今後の課題を述べたい。

いわゆる Less Commonly Taught Languages の CALL について書かれた Carol Anne Spreen 編 *New Technologies and Language Learning: Cases in the Less Commonly Taught Languages* (University of Hawai'i Press, 2002)には、限られたリソースを最大限に活用し効果的に CALL を実践する方法が様々なケースを例に記述されており、多くの示唆を我々に与えてくれる。その中で取り上げられる手法として、例えば自国にいながら対象言語のネイティブスピーカーと対話する機会を提供する Distance Learning や、遠隔教育に加えて留学生を中心とするネイティブスピーカーとの日常的な会話の機会を確保し両方を有機的に関連付けて実施する方法(Blended Learning と呼ばれることもある)、また web 上の素材をうまく活用し、教材不足を補う方法などが提案されている。本学外国語学部の場合、スタッフ数と教授時間数を考えると、もとより上記諸ケースより恵まれた状況にあることは明白だが、ネイティブスピーカーとの接触の機会や自習用教材の量を考えると、大いに参考にすべきところがある。

本学ベトナム語の場合、授業時間外にネイティブスピーカーと接触する機会が限られるという問題はやはり存在する。そこで、交換留学生との交流の機会を、チューター、日本人・ベトナム人共同参加型授業、イベントの共同企画など様々な形で確保するよう努めている。また、ベトナム諸大学との交流協定締結により交換留学の機会を増やすよう努めつつ、今後も充実させていく予定である。目下の主な問題というと、やはり授業時間外の自習用教材の確保ということになるだろう。授業で使用する教材の予習・復習の内容としては、ベトナム語のような孤立型言語の初級学習の場合、辞書を引いて語意・文意を確認し、テキスト中の会話文を暗誦するという伝統的手法に尽きると思われる。そこで我々に支援できることは、学習素材を学習者のニーズにあわせて多様なメディアで提供することである。初級ベトナム語の場合、独自開発の教材に含まれる音声・映像を汎用性の高い形式(.mp3, .mov 等)と iPod に対応した形式(.m4v)等で提供している。必要な学習者には音声 CD で配布すると同時に、データそのものは WebCT からダウンロード可能となっている。

初級学習の要となる発音学習を支援する方法として、以前非常勤講師として CALL システムを利用させて頂いた際、細谷先生や当時助手をされていた堀井先生のお手を煩わせ、音声分析ソフト Speech Analyzer を利用したことがある(http://www.sil.org/computing/sa/index.htm)。各声調素の pitch contour をモデルと比較する方法や、有気・無気閉鎖音の spectrogram の比較、また広狭母音の区別に F1-F2 プロット図等を利用した。これらは発音練習プログラムがまだ存在しないベトナム語発音の自主学習に一定の効果があり、好評であった。蛇足ながら、最近同じ用途で PRAAT を利用する人が多いが、F1-F2 プロット図の表示機能は PRAAT にはない。

中級リスニング授業にもやはり CALL システムの利用が有効である。現在は web 上のニュース素材を利用して、空所補充問題の形で練習を行っている。あらかじめ編集した音声を授業用 web ページにアップしておき予習を課す。徐々に空所の数を増やし最終的に全文を聞き取れるようになろうというのが目標である。前期は NHK オンライン外国語ニュースを中心に(http://www.nhk.or.jp/nhkworld/vietnamese/top/index.html)、内容そのものは学習者にとってなるべく既知のものを扱い、後期はベトナム国内のニュースとして VTC online 等の素材を利用している(http://www.vtc.com.vn/)。コンテンツ

の性格上、自ずと前者はボトムアップ的、後者はトップダウン的な練習方法となっている。音声素材の編集に際しては、文毎にポーズを挿入したものを別に用意しておき、Windows Media Player の再生速度調整機能などは使わないよう厳しく指導している。

初級・中級の授業を通じて CALL システムを利用する中で、授業中しばしば脳裏を過ぎるのは、学習者に課す個々のタスクの中で実際に計算機がなければ実現不可能なものが一体どれくらいを占めるのだろうか、という疑問である。先日福岡で行われた WorldCALL2008 のとあるパネルディスカッションの場で、限られた予算内でいかに CALL を行うかが話題になり、各国のスピーカーの血の滲むような努力を目の当たりにし、自省の念に駆られた。もちろんパーソナルコンピュータそのものが単一のプラットフォーム上で様々なタスクを同時に実現する利便性を備えるものであり、それ自体が CALL の意義の一端を担っているのも事実ではあるが、CALL でなければならない部分をもう少し突き詰めて考えるべきではないかと大いに反省した。

そういった意味で、上記の音声分析ソフトの利用などは、発音学習における CALL の有効性を端的に示すものかもしれない。つまり、自らの発音の癖を視覚的に捉え、どう調音したらその結果がどう変化するかを自分なりに模索しつつ徐々にモデル音声に近づけていく訳である。しかし、視覚的に捉えられる部分(つまり音響分析により得られるフィードバック)は全てを誰もがわかる形で明示的に示してくれるわけではない。例えば、有気・無気閉鎖音の差異などは、比較的わかりやすい形で spectrogram 上に現れるが、ベトナム語におけるその対立と中国語普通話におけるその対立の差異(つまり調音時の喉頭緊張度の差異、ベトナム語の有気閉鎖音の場合それが極めて低く、実際帯気性より喉頭化の差の方が際立っている)などは別のパラメータ(例えば後続母音部の intensity 等)も加味した上で見るしか方法はなく、それら二次元的な情報の同時分析を各学習者に課すことはあまり現実的ではない。やはり、人間の教師の指導が欠かせない部分ではないかと思う。

web 上の素材をリスニングやリーディングの学習に利用することは、CALL の醍醐味の一つと言えるかもしれない。実際、当該授業に参加する際の学習者の積極性が極めて高いのも事実である。一方、教師の負担の大きさを考えると決して楽な方法とは言えないのも事実である。素材の内容と学習者の習熟度を常に考慮しながら隔週程度のペースで音声ファイルと問題テキストを作成する訳だが、言うまでもなくその時事性と著作権上の問題からほぼ 1 回きりの内容となってしまうのは仕方がないことである。昨年度はニュース素材に加えて映画をリスニング授業に利用したが、ベトナム映画の場合、特に南部方言の作品が非常に多く、通常学習対象とする北部方言を基礎としつつ教材として利用可能なものとなると意外と数が限られコンテンツの選定に苦慮した。ただ、ニュース素材と映画素材を比較した場合(もちろん言語スタイルに差はあるものの)、やはり映画素材の方が定着度が高かったようである。余談になるが、かつて講読用教材として学んだホーチミン主席の独立宣言が、今や web 上でその肉声と共に映像が参照可能である。隔世の感がある。

今後、世界言語研究センターのプロジェクトとして様々なマルチメディア教材が開発される予定であるが、どのようなコンテンツをつくるにせよ、教師と計算機それぞれの役割をしっかり見極めた上で個々のデザインを考える必要があると痛感する。また、それらの素材をスムーズに利用できるような環境の確保が続く課題となるだろう。各メーカーが提供する既存の CALL システムに大きな差異はないのかもしれないが(細かいところは知らないが)、教師の数だけ CALL の方法があることは事実である。それら全てにきめ細やかに対応すべく、日々 CALL システムの管理に当たられているサイバーメディアセンタースタッフの方々のご尽力に、改めて敬意と謝意を表する次第である。